

肝臓のすぐれた働きに学ぶ

不言実行、そして寛容。

肝臓のすぐれた働きに品性を学びましょう。

肝臓という臓器を知らない人は、まずいないでしょう。酒飲みにはもっとも気にかかる臓器ですね。

この肝臓に私はつねづね感心し、敬服さえしています。

なぜなら、肝臓は正常なときはごちゃごちゃ言うことがありません。余分な細胞分裂もしないで、静止状態でいます。黙って働いているのです。血中を流れているたんぱくの 80 パーセントは、肝臓でつくられていると言われます。

ところが、いったん事が起こると抜群の再生能力を見せます。手術で 3 分の 2 を切除しても、ほぼ数週間で再生します。異物に対しては実に寛容です。解毒、代謝作用もあります。

美德とも言える不言実行と寛容性。肝臓は両者を兼ね備えています。

人間も、この肝臓のような人になれば、きっと人格者としてうやまわれるでしょう。自分の体の中に、こんな臓器があることを知るだけでも、あらためて自分の体を大切にしようという意識が芽生えませんか。

「みなさん、肝臓になりましょう」

「日本の国も、肝臓のような国になったら、世界中の尊敬を集めますよ」

がん哲学外来や講演などでそう言うと、必ず温かい笑いが起こります。

興味深いことに、人間の臓器は約 200 あると言われていたのですが、世界の国と地域の数もほぼ 200 です。

「がん哲学」を国際社会に当てはめて考えれば、世界の国々がそれぞれ体内の器官の役割を果たすように関係し合えば、健康な体、つまり、平和な社会が成り立つでしょう。

中でも、肝臓のように要となる役割を黙々とこなして、たとえ部分的に機能しなくなったとしてもすぐに再生する、そして、異なる文化や社会を寛容に受け入れるような国に日本がなることに、私は意義があると思うのですがいかがでしょう。

しかし、現在の日本社会は、本来の役割を確実に果たす「正常細胞」が減少し、使命を見失った異常細胞、つまり、「がん化した細胞」が増殖する傾向にあるように感じています。その要因は、ひとつにはコミュニケーション不足が挙げられ、ひとつには自己中心的で他者をかえりみない言動が横行することだと思います。

社会のがん化を防ぐには、ひとりひとりが人として生きる真の使命を自覚することから始め、役割を全うすることです。他者の個性を寛容に受け入れ、自分の主義主張よりもさらに大切なものがあると考えてみることです。まさに、社会も個人も、「いい覚悟」で生きるヒントを肝臓に学び、がん細胞に学ぶ必要があるのではないのでしょうか。

樋野興夫著

いい覚悟で生きる より

